

ハーバート・ブルーマーにおける相互作用の「内在性」について

～初期シカゴ学派の系譜にハーバート・ブルーマーはどのように連なるのか？

芦 川 晋

0. はじめに

本稿の目的は、初期のシカゴ学派の研究、とりわけそれに理論的基礎を与えたとされるC・H・クーリー、W・I・トマス、G・H・ミードの議論に検討を加えながら、シンボリック相互作用論（象徴的相互作用論）の体系化を図ったハーバート・ブルーマーの議論と初期シカゴ学派との研究をつきあわせて、シンボリック相互作用論のもつ理論的意義を明らかにすることにある。ブルーマーは「社会」というものを個人ないしは集団の相互作用というレベルに持ってきた（もっとも、この点ではゲオルグ・ジンメルという先達がいる）。しかも、相互行為の動因を相互行為の「外側」に求めることなく「自己との相互作用」の働きも含めた「相互作用の文脈」で決まるものと考えた。いわば、「内在的」な相互作用論とでもいうべきものを構想したのである。これは同時代的に見て高く評価できるものだと思う。ただし、残念ながらそれを十分展開できるだけの枠組みを用意することはできていなかったように思われる。最終的に本稿で確認するのはこの点、つまり、ブルーマーの議論の意義とその限界である。

なお、最初に断っておけば、この論文は別の論文の補論として書かれるものである。現在、初期シカゴ学派、とりわけ、ミード＝ブルーマー、ハワード・ベッカー、アーヴィング・ゴッフマンを介して社会構築主義にいたる「自己論」（自我論）の系譜をたどり、社会構築主義の物語的な「自

己論」の構成を批判的に吟味する別稿を準備中である(芦川 forthcoming)。もっとも、初稿が大部なものとなってしまい、ミード=ブルーマー、ならびにゴッフマンの部分は極めて簡潔な内容に圧縮せざるを得なくなってしまう。そこで、ゴッフマンについての詳細は既発表の論文に譲ることとし、ミード=ブルーマーについては削除部分の記述をミードとブルーマーにはっきりと振り分け、ミード、ブルーマーに先行する議論の検討部分を付け加えて独立の論文とした。それゆえ、本論文は別稿のミード=ブルーマーの議論の補論としても、独立した論文としても読めるようになっている。また、それによりブルーマーと初期シカゴ学派の影響関係が、もっぱらミードに由来するというより、プラグマティズム、あるいはパークやトマスとズナニエツキらに由来する部分がかなり大きいということがわかるはずである。

1. シカゴ学派の誕生～R・E・パークを中心に

当然のことながら、「シカゴ学派」が誕生する頃には、シカゴ学派という名称もなく、大学、民間団体の区別なく同様のフィールドワーク研究が行われていた。南北戦争(1861-1865)以降、米国は大規模な経済発展を遂げる。第二次産業革命、ひいてはそれに伴う「組織革命」(「所有と経営の分離」等)が進行するなかで、大規模工場をはじめとする大規模組織が登場する。一方で、大量の移民が安価な労働力の供給先となり、都市化が発展・拡大して大衆社会が成立してくる。大衆社会化状況の進展と移民の流入があいまって、社会的な規範が弛緩する一方、多様な下位集団が生まれてくる。そうしたなか、さまざまな「社会問題」が生じてきた⁽¹⁾。それがフィールドワークの対象となるわけだが、それはこんな展開をとることが多かったであろう。

産業化で都市が変貌し、またそうした都市に多様な人々が流入していくとき、従来の「第一次集団(内集団)」で通用していたやり方だけでは都市生活を渡っていけない事態が生じてくる。となれば、改めて都市で生き

るやり方を受け入れるよう同化するか、新しい技法を見つけて生き残るか、そのいずれも放棄して逸脱行動に走るか（「下位集団」の形成）、それとも新しい世界への適応に断念するかといった具合に適応／逸脱行動が生じてくるだろう。そこに「社会問題」があり、それが一連の「逸脱研究」につながる。

たとえば、ジンメルの影響を受けたパークは、こうした流動性の高い都市における人間関係をとらえるために「社会的接触」という概念を導入した。とりわけ移民等は、移住などの結果、伝統的組織が解体し、個人は一時的に解放されてパーソナル類型を変化させるが（cf. 中国人の「体面」の重視）、しだいに個人の再統合が始まり、新たな社会秩序が形成され、伝統的組織は分業した社会組織に取って代わられる。

しかし、「昔からの人々」にしてみれば、よく知らない人々と接触しようにも、どうつきあえばよいか分からない。そこから不安感や危険の意識が湧きあがり、それを動因として自らをなるべく相手から距離を置くように仕向け、その過程で「人種的偏見」を生み出していく。「人種意識は、人種的慎み、反感、―――禁忌のように観察されるかぎり、必ず後から獲得される特性」である（Park 1928a 77 頁）。つまり、偏見とそれに伴う言動も新しく登場してくる行動様式なのである。このとき、パークは、とりわけ人々の態度形成のうえで重要な意味を持つものとして「視覚」をあげ、人種間の文化的な同化の障害は身体的特性の差異に由来するという。また、臭覚（「鼻つまみ者」）や触覚（「不可触民」）も反感の強化に寄与する。

とはいえ、これらは自然的なものというよりは因習的な起源を持つものであり、加えて人々がエチケットや儀礼を介してとる「社会的距離」が、個人や階層間の地位関係の維持に効果的に働く（Park 1928a 85 頁）。その一方、十分な社会的承認や参加を得られず、新旧二つの文化の境界を生きざるをえない人々は「マージナル・マン」と呼ばれる。たとえば、白人と黒人の関係では、白人には伝統的で差別的な社会秩序に回帰しようとする

る傾向があり、それが黒人に劣った地位をわりあてるのである(Park 1928 b)。

また、パークは、こうした議論に並行して、すでに「集合行動論」を展開しており、集合行動とはやはり秩序再生、新しい制度の創造のプロセスとされ、このときの相互作用の動因はやはり「社会的不安」であるとされる。社会的不安が社会運動を再生産するのである。もっとも、集合行動の社会過程には三つの類型が指定されており、①「模倣」、②集合的注目に由来する「大衆運動」、これらはいずれも視覚に中心をおいた非合理的な群衆の活動であるのに対し、③「公衆」は「競争」に基づき、個人間の討議を通じた世論を介してあらわれてくる合理的な活動である⁽²⁾。そして、公衆の活動においては、「直接の知識」と「対象についての知識」との連続体の間に位置する、「擬似現在」としてのニュースが人々に話題を提供する(Park 1940)。ここに「競争」が生じるわけであるが、ここから、のちに「人種関係サイクル」と称する「競争」、「闘争」、「応化」、「同化」という相互作用類型が提示されていくことになる。

あるいは、「アノミー論」として知られるR・K・マートンの議論では、のちに新しい社会集団への適応様式を「文化的目標」(目的)と「制度的手段」(手段)の有無の組み合わせで分類し、①同調、②革新、③儀礼主義、④逃避主義、⑤反抗という五つの類型を得た。この分類については批判もあるが、やはりこれもシカゴ学派の研究成果を図式的に整理したものである(Merton 1957)。

もちろん、フィールドワーク研究で問われてくるのは社会現象がどのような類型に落ち着くかということではなく、一定の類型におさまるような、あるいはおさまりきれないような新しい行動様式がどのように生まれてくるかという「社会過程」である。そして、初期のシカゴ学派が取り扱う社会問題のフィールドワーク研究の少なからずは、当時から、たとえ直接に明示されることがなくとも、プラグマティズム、とりわけG・H・ミードの理論的発想が反映されていると見られていたという。実際、パークは

自らの教え子たちにミードの講義を受けるようすすめていたという話もある(中野・宝月編 2003)。

ミードの考え方の中心にはプラグマティズムに由来する「科学的な方法論」を社会ないしは自我論に応用するというスタイルが見いだされる⁽³⁾。たとえば、制度には、一定の儀礼的ないしは慣習的な意味(価値)付けがなされているが、現実の制度はそうした意味付けとは異なる機能を備えていたり、備えるようになることがある。科学的な方法論では、こうした例外的な問題状況が、社会でどのような意味を担っているのか、いかにするなら世界がどのように再構成されているかを明らかにする。これは問いを立てたうえでそれに見合った仮説を見だし、それを検証しようとする態度に類比できる。しかも、こうした変化は、科学同様、社会の進歩にあたりと考えられていた。

中野・宝月(2003)では、E・H・サザーランドの『ホワイトカラーの犯罪』(1949)がその一例としてあげられている。サザーランドは従前から下層階級に見られた犯罪を「街頭犯罪」と呼び、この枠組みでは説明できない犯罪の登場を「問題状況」と見て、上層階級が職務の上で犯す「ホワイトカラーの犯罪」という概念を仮説として提起する。ここに「me-I」図式を見て取るのはたやすい(詳細は後述)。従来の「街頭犯罪」に加えて「ホワイトカラーの犯罪」という新しい行動様式が社会のなかに生まれてきたのである。ただし、ここでは、パークの議論同様、一個人が新しい行動様式を再構成するといった「自己の再構成」よりはずっとマクロな現象が想定されているとみるべきであろう。

このサザーランドの説明に対して、刑事と民事の違いを無視しているとか、あるいは双方を包括して説明できる「差異的接触論」がはたらく過程を説明できないとかいった批判がある。とはいえ、「ホワイトカラーの犯罪」に関して言えば、いささか年代は遡るが、第二次産業革命、ならびに組織革命の勃興期にビジネス倫理学の隆盛が見られたことは注目されてよいであろう。比較的自由主義的な経済から大規模に組織された財閥が支配

する寡占経済への移行にあたって、明らかにそれまでとは異なるビジネス倫理が要請されたのである。そこに組織型の「ホワイトカラーの犯罪」が生じる余地が出てきたのだ。なお、余談ではあるが、近年のビジネス倫理の興隆も、いわゆる「フォーディズム」体制の終焉、つまりは新自由主義ないしは金融の自由化、グローバリゼーションの進展とおそらくは無関係ではない。

そして、このようなミードの議論の「応用」が、後にフィールドワーク、エスノグラフィーの方法論としてハーバート・ブルーマーによりシンボリック相互作用論として結実することになるわけだが、ここではミードないしブルーマーの概念の検討に進む前に、すでに簡単にふれたパークに加えて、ミードと同時代にやはり影響力を持った隣接する論者の議論を確認しておきたい。そうすれば、ミードへの影響関係はもちろん、必ずしもミードを媒介しない影響関係をも、ある程度明らかにすることができるだろう。たとえば、後でブルーマーの議論を見ればわかるが、パークのブルーマーへの影響は想像以上に大きい。なお、本稿では、プラグマティズムよりも、より社会学・社会心理学と結びつきのあるW・I・トマスとC・H・クーリーの議論を中心に据えて概観しておくことにしたい。

2, W・I・トマスとC・H・クーリー～G・H・ミードの前に

ということで、時系列的には逆になるが、前史として、W・I・トマス(1863-1947)とC・H・クーリー(1864-1929)の順で簡単にそれぞれの議論を見ていくことにする。というのも、トマスはハーバート・ブルーマーに影響を与えたと言われており、クーリーの自己論はミードの自己論に先駆けに相当する。ここではとりわけミードとの関連を意識しながら、二人の議論を簡単に見ておくことにしたい。

まずW・I・トマスであるが、トマスはズナニエツキとともに『ヨーロッパとアメリカのポーランドの農民』(1918-1920)という浩瀚なモノグラフを公刊している。トマスに特徴的なことは、社会一心理学的な方法論を

実証研究と結びつけて論じているところにあり、それが他の諸研究との結節点ともなっている。トマスはジョン・デューイの心理学の影響下において、デューイらが本能から習慣へ力点を移したように、民族学心理学やボアズの影響を経て、人間に共通の遺伝的基盤に対して実際に観察される差異を説明するものとして、習慣や注意の法則、歴史の偶然に関心を向ける社会心理学的な理論にたどりつく。

トマスは、恣意的な解釈を避けるために議論がたどりうる道とは、まず社会の総体から個人が直面している問題状況に目を向けるか、まず問題状況に目を向け、そうした社会問題が生じる社会的背景に向かうかのいずれかであるという。トマスは個人と社会は視点の違いであるとも述べており、このとき仮説は以下の二つ問いのいずれかを具体化して立てられることになる。社会組織や文化は個人にどのような精神的・道徳的特性を埋め込んでいくのか、あるいは個人の精神的・道徳的特性を介して社会組織や文化はどのようなスタイルを獲得することになるのか？背景となる文脈から「科学的」な問いに向かい仮説を引き出すか、問いが成り立つ状況からその文脈に目を向け仮説を引き出すか、のいずれかになるというわけである。

そして、トマスはこの二つの要素が相互作用する場として「社会的状況」というものを考える。社会的状況では、主観的な「社会的態度」(社会心理学)と客観的な「社会的価値」(社会学)が相互に交錯する。「社会的価値」とは、社会の成員が意味付けできる、活動の対象あるいは可能的な活動の対象のことである。価値には、物質的なものもあれば(大学の物質的存在)その活動が示すイメージ(大学とはどういうところか)と結びついた象的なものもある。「自然的事物」は人間の活動の対象となるかぎりではなんらかの「社会的価値」を持つのであって、「自然的事物」それ自体のようなものがあるとするれば、それは社会的には「無意味」である。

他方、「社会的態度」とは社会的世界における個人の実際の活動、あるいは活動の可能性を規制する意識過程である。「心的状態」とは、「社会的

価値」が「自然的物事」から区別されるように、注意の反省作用により「何かに対する態度」を「誰かの心理的過程」として抽出してくるものであり、そのような意味において「自然的物事」も「個人の心理過程」も同種の抽出物にすぎない。たとえば、W・ジェームズの「意識の流れ」という表現も「何かに対する態度」についての説明上の抽出物であろうし、ましてやデカルトの「コギト」は究極の抽出物と言えそうである。

こうしてミードにも見いだされる意識とその外界にまたがった「社会的」という用法がすでにここにもあらわれている。実際に活動しようと、心理的に活動に向けた構えができていようと、それが「社会的な」ものであることに変わりはあるまい（ただし、ここでいう構えが本当に心理的に説明されるものであるならば）。

この「社会的態度」から「社会的価値」を統制することで、有名な「状況の定義」という話が出てくる。「状況の定義」とは個人が行為を選択するために、自分自身を含む状況全体を意識的に再構成する反省過程のことであり、当然、これは個人の「社会的態度」に依存する。そこで「人が状況をリアルと規定するならば、その結果、状況はリアルとなる」と言われる。ここにも「社会的態度」と「社会的価値」の齟齬という問題状況とその解決としての「状況の定義」という枠組みを見いだすことができる。マートンはこれを「トマスの公理」と呼んでいるが、それが後の予言の自己成就の話に繋がることになる。

さて、このように社会的価値と社会的態度を区別したトマスは、社会が必然的に要求するような態度というものがあり、これを「基本的な人間固有の願望」と呼び、①新しい経験、新鮮な刺激への願望、②承認への願望、③支配への願望、④安定への願望の四つに分類している。そして、この四つの「願望の一般的パターン」は人間が社会的環境へ依存する基本的な方向性を示すものであり、だからまた効果的な社会統制の方向性を示すことにもなるという。実際、これらの類型は第一次集団の社会組織の背景となって個人の発達に統制を加える（社会教育）。

そして、これに対応するパーソナリティ類型として、①同調型のフィリスティン、②可塑性を残したボヘミアン、③変化へ適応する創造的人間。こうした願望とパーソナリティ類型を編み出すことで、移民に伴う社会(第一次集団)の解体が「状況の定義」を介して社会の再組織につながっていく。そして、それはいささか本質主義的な規定ではあるが、パークらが発展させた類型を実証研究と両立するかたちで理論的に類型化したものにもなっている。

次に、より自己論に立ち入って論じているC・H・クーリーの議論も概観しておく。クーリーの段階では、社会を考えると、習慣への注目があるものの進化論的色彩も強い。人間は適応性を有し、相互依存的な過程のなかで伝統、制度、慣習、理論、理想などが分化した社会へと組織されていく(『社会過程』1920)。クーリーにとって相互依存している人間の間に存在しているのは「人間の生活」であり、分離された個人も個人と切り離された社会も抽象物に過ぎない。一方、だからこそ、人間の生活は個人の側からも社会の側からも考察することができ、個人と社会とは視点の相違に過ぎないという。ちなみに「人間性」は個性的で非社会的な傾性・能力と社会的な傾性・能力からなり、この個人性と社会性も相互補完的な関係にある。つまり、「人間の生活」と「人間性」は類比的な関係にあるわけである。この「人間の生活」を「社会的状況」に焦点を充てようとするトマスの図式に類比してみることもできるだろう。

そして、個人の社会性と理想が形作られる場が「第一次集団」と呼ばれる。第一次集団とは、親密な関係と協調性を特徴とする家族・遊び仲間・近隣からなる集団(we)である。この対面的な集団の影響力は他の集団の何にも増して大きく、生活の源泉として個人のみならず社会制度にも影響を及ぼし、第一次集団はおおよそ普遍的な性質を持つという。

他方、第一次集団は個人にとって人間性の源泉であり、人間性とは集団の性質(社会心)に他ならない。それは、本能に加えて、人間の心にある

観念や感情の基盤を提供する（後に、これは遺伝と社会的環境の相互補完の関係へと拡張される）。このように第一次集団は人間性と社会生活の温床であり、普遍的な人間的価値として愛、自由、正義、忠誠、共感、奉仕、思いやり、真実、法の遵守といった一次的な価値や理念が生まれてくる。

W・ジェームズの影響を受けながら、以上の議論の延長としてクーリーが展開する自己論も形而上学的なそれから一人称代名詞で示されるような「経験的な自己」「社会的自己」に引き下ろされる。そして、この経験的自己の中心に位置するのは「自己感情」(self-feeling)である。自己感情の基礎となるのは身体であり、身体は一人称代名詞で言及できる。身体が自己意識や自己制御の基盤を提供する。この自己感情はもともとは衝動的なものであるが、世界での経験を経て、社会的な自己へと変貌していく。感情に根を持つこの自己が、想像のなかで、現実のあるいは想像上の他人の反応を反省的に引き出すようになるのである。これが鏡映的自己、鏡に映った自己 (looking glass self) である。経験的自己の自己感情は「私」(my)の態度を明らかにする。そして、われわれは自己感情が他人にどのように映っているかを想像するなかで、自分の感情が動いていき、ひいては人目を気にする。つまり、あらかじめ他人の反応を想像しながら自分の反応を決めているわけである。この他人の反応の時間的な先取りはまさに後のミードに受け継がれるものである（『人間性と社会秩序』1909）。

こうして、われわれはトマスとクーリーを経ることで「社会的状況」や「人間の生活」という人々が交わる場、そこで発揮される個人の「反省的な過程」とその「社会性」がもたらす「状況の定義」や「鏡に映った自己」といった意味付与過程からなる議論の構成を概観してきた。ちなみに、トマスのいう社会的価値には、当然、対象としての人間の活動や態度も含まれる。ここで、対象の一つにはほかならない人間にこの議論をあてはめようとすれば、他方で互いの態度をどう整合するかという話が必要になる。このときクーリーの感情のすり合わせのような議論から態度をすりあわせる議論を引き出せば、その議論はミードの「他者の役割取得」というプロセ

スにかなり近いものになるだろう。

他方で、この二人の自己像のなかですでに共通して見られる特徴を最後に指摘しておきたい。彼らが想定している自己論の段階で、すでにデイヴィッド・リースマンというところの「他人指向型」社会の到来は十分に暗示されていると思う(Riesman et al 1950)。そして、興味深いことにミードの議論がそうであるように、リースマンも教育論を展開している。ところが、自己論の系譜を考えると、ホルスタインとガブリウム(Holstein & Gubrium 2000)はこうした関連を考慮することなく、リースマンの議論を「同調的な自己」として自己の「暗黒面」に位置づけてしまっている。

しかし、最初に時代的背景を確認しておいたように、第一次集団を超えて社会が変化し、再組織化していく過程で、あらかじめ用意された行動モデルなどあるわけがない。とすれば、各人は互いに互いがどうふるまうかを意識しながら自らの行動を決めざるをえなくなる。実際、リースマンも「他人指向型」の社会的性格の登場を産業社会の到来と結びつけていた。これは19c末に端を発する事態であり、また、1930年代のアメリカに大衆社会的要素を見つけるのは容易なことである(でなければ、ファシズムへの動きなど生まれてくるわけがない)。「他人指向型」の社会的性格を第二次世界大戦後に結びつけるのはあまりに安易な考え方である。そして、この「他人指向型」という社会的性格はミードの自己論にも典型的に見いだされるものなのである。

3, G・H・ミードの社会心理学

すでに若干見ておいたように、G・H・ミードにいたるまでに、W・ジェームスは思考過程を「意識の流れ」として、C・H・クーリーは「自己感情」を一人称代名詞と結びつけて、W・I・トマスは意識過程を「社会的態度」として、いずれも個人の心理過程を「対象」としてみる視点を発展させていた。ミードも、他の物理的対象がそうであるように、「自己」は「対象」とであると明言する。正確には「自己」(self)とは個人が同一

の人物を対象とするときそう呼ばれる。

では自他の交わり、相互作用はどのように進行していくのであろうか？このときミードは個人が自己と他人に同じ刺激を与えられることに注目する。「人間という動物が、他者たちを刺激できるように自分自身を刺激でき、また、他者たちの刺激に反応するように自分自身も反応できる」とき社会的に「対象形式（対象の意味）」が移行する。つまり、単純に他人の模倣をするのではなく他人の反応を模倣できるような刺激を自己ならび他人に与え、それに見合った反応を他人から引き出すことを期待できるようになる。この対象形式の移行が「他者の役割取得」（態度取得）と呼ばれるものである。この他者の役割取得は、素朴な刺激—反応図式にのった行動主義とはまったく異なり、一般に「社会行動主義」と呼ばれる。個人に必要なのは他者を模倣する能力ではなく、他者の反応を模倣可能にする刺激を用意できることなのである⁽⁴⁾。それはどのようにしてか？

他者の反応を想像上で模倣する方法の原型を、ミードは「音声身振り」（vocal gesture）に求めている。音声身振りにおいて自分に聞こえている音声は他人にも聞こえているはずである。だから、他人に自分と同じ反応を期待できるというのである（私にはこれが十分な説明になっているのか疑わしい）。そして、幼児が、この「自己」という対象形式（意味）の移行過程を身につけるにあたって「ごっこ遊び」から「ゲーム」（「一般化された他者」）へと説明したのはよく知られている。

ただし、このとき注意しておきたいのは、幼児はあらかじめ自己を具えているわけではないのだから、その音声身振りは、当初、他人にとってのみ意味を持つということである。幼児はこの他人の反応を取り込むことによって、自己に同じ刺激を与えられるようになり、他人の行動を先取りできるようになる。この過程を経て役割、ひいては慣習や規範を共有し、対象形式（意味）を移行させる要件である、想像上の自他の立場交換が可能になるわけである。

ところで、この音声身振りを介した対象形式（意味）の移行は、発達上、

「外語」から「内語」へという過程をとるであろう。たとえば、「ごっこ遊び」は、落語ではないが、一人でもできれば複数でもできる。なかでも、十分に「ごっこ遊び」ができるといえる段階では「ごっこ遊び」は一人で人形を使っても、あるいは使わずに黙ったままでも遂行できるはずである。つまり、誰からもうながされることなく、双方に期待されることを想像のなかで把握でき、他者の反応を模倣できるようになる。こうなれば音声身振りに変わって「有意味シンボル」が対象形式(意味)の移行、つまりは他者の役割取得(態度取得)に重要な役割を果たすようになる。

さらに、ゲームの段階については、たとえば野球をするにあたって最初はごっこ遊びの延長として自分を王や長島になぞらえるかもしれないが(古い!)、そのうちゲームのなかで分化した役割そのものやゲームにまつわるルールを抽象化して身につけていく。つまり、具体的な他者(のつもり)から役割関係やルールの集積を把握した「一般化した他者」(me)へと移行する。あわせて有意味シンボルの集積として成員に同一の対象形式(意味)の移行、役割・態度取得を可能にする「話想宇宙」が存在するようになる。

自己関係をここまで把握できるようになれば、われわれはその個人が十分な意識を持っているとか、思考できるとか言うであろう。こうしてわれわれは「自己」(self)という対象をそなえるようになる。つまり、他者に期待できる役割を想像しながら、自分の行動を決めることのできる「一般化された他者」(me)の立場に身を置くのである⁽⁵⁾。さらに個人が準拠する集団が複数あり、必ずしも各人の間でそれがすべて重ならないのであれば、一般化された他者が準拠する社会集団は複数あると考える方がもっともらしい。たとえば、田舎と都会。あるいは、子どもの獲得する物理的世界の範囲が社会によって異なってくることも補完材料になるだろう。

あわせて、対象として自己をはっきりと持つ人間は「私(I)」その他の一人称単数の代名詞を不自由なく用いることができるはずである。“Hallo, It's me”. 「私」という代名詞は常にそれを用いる人物を映し、潜在的に

「私」以外の個人の存在「あなた（たち）」、「彼（女（ら）」の所在を示す。つまり、役割取得する対象と「私」を一定の関係の間柄に据える。しかし、ミードよりもクーリーが人称関係に注意を向けているのは興味深い。というよりも、「音声身振り」に基礎をおくミードにとって人称関係は基礎的なものにはなりえないのである。

そうはいつても、人間は「私 (I)」になる。この「私 (I)」は、たとえ口にされることがなく、意識にのぼることがなくとも、個人が自己を対象化するかぎり、概念的には必ず同伴してくるものである（カントを想起せよ）。「やっと（私は）アメリカ合州国大統領になれた」。このように「私 (I)」は対象（「アメリカ合州国大統領」）である自己の背後に潜んでおり、対象として「述語付け」されている自己とは「私 (me)」のことである。もちろん、この「私 (I)」をも述語にしてさらに対象化することもできる。「やっと（自分は）大統領になれたんだな」。ただし、自己の対象化過程が更新されれば、あわせて背後にある「私 (I)」もさらに引き下がる。

こうしてみれば、I、self、me の関係がわかる。個人を「自己 self」として対象化しようとするれば、そこには少なくとも潜在的に「私 (I)」がつきまとい、対象化した「自己 self」とは述語付けされた「私 (me)」のことである。そして、述語づけしている「私 (I)」をさらに自己として対象化すれば、今度はそれが「私 (me)」となって、「私 (I)」はその背後に引き下がる。

ところで、相手から期待した通りの反応を引き出そうとするのであればそれなりのやり方を考えなければならない。ミードはここに「精神（こころ／mind）」がはたらいているという。つまり、精神（こころ）のはたらきが対象形式（意味）を加工するのである。実際、ミードによれば、行為は、没問題状況では慣習が刺激と反応をつないでくれるのに対し、問題状況では刺激に対する反応が遅延し、内省的に対象との関係を作り上げ、その上で反応して問題状況を解決する。ミードが行為の四局面として描くプロセス①「衝動」（刺激の選択のきっかけ）、②対象の「知覚（注意）」（行

為過程の先取り)、③対象の「操作」(対象形式の加工)、④完成(衝動の解発)の過程は上記のプロセスを生理学的に説明したものであり、③を含んだ②のプロセスで精神・知能が働く。また、ミードは単独の行為だけでなく、分業も視野に入れており、それは「社会的行為」とか「複合行為」と呼ばれる。

話が戻るが、人形でごっこ遊びができるように、子どもの世界はもともとヒトと関わる社会的状況のみからなっていて、抽象過程を経て、物理的な対象という反応の返ってこない対象との関係を身につけるようになる。これには子どもたちが生きているのが「未開社会」ではなく科学の支配する世界であるということとも大きく関わる。後者の方が擬人化した存在の居場所は極めてかぎられているからである。

このとき「物体」に触れるという「接触体験」がまず意味を持ち、それで物的対象の役割を知るようになる。その上で、行為過程が内省により遅延して視覚的な「離隔体験」が成立し、この「知覚」から刺激が解き放たれ、対象とかがわる。つまり、本来なら「触れる」ときに知ることになる対象の意味を「見る」段階で先取りして行動に移すことができるようになるのである(「物的態度の取得」)。

ところで、相手が人間であれ物的対象であれ、問題状況で慣習におさまりきれない対象形式(意味)の加工が必要になるのであれば、まず既存の態度や役割を対象化する必要がでてくる。つまり、「私(me)」に加えて「私(I)」が作動するはずである。そうして初めて新規な事態に対応する新規な行動を生み出すことができる。もちろん、対象化するとき作動している「私(I)」はそれ自体が対象化されなにかぎりやはり意識されることはない、しかし、「私(I)」の作動が慣習から逸脱した新規で残余的なものを行為に持ち込む契機になるのである。もっとも、こうした事態はいつ起こるか分からないし、厳密に言えば慣習的な行為もいつもまったく同じように繰り返されるわけではないから行為にはつねに「私(I)」が伴っているとよいかじめ「私(I)」が常に伴って

いるという当初の議論へと一巡りすることになる。

いずれにせよ、新規な社会的状況で既存の慣習に収まりきれないケースにあっては「私 (I)」の作動を介して新しい状況にかなった行動が導き出されてくる。それは個人が直面した一時的な困難の場合から、変わりゆく社会のなかでの慣習の更新や制度の創設につながるものまでかなりの幅をもっている。しかし、これを素朴に相互作用上で起きることとして考えれば、人前で現れてくる癖とか⁽⁶⁾、やりとりで生じた問題状況の対処といった事柄にもっぱら焦点が当たることになり、慣習や制度の更新といったことには直ちに繋がらない。慣習が更新されるような問題状況なら幾人もの人々が同じような事態に直面したり、それが伝播していくような時間的な蓄積や空間的な広がりが必要になってくる。

しかし、こうした事態はむしろマクロ的な過程と言うべきで、ミードに付されてきた「マイクロ社会学」というイメージを逸脱してしまう。これはブルーマーのミード解釈に対する批判にもつながるが、そもそもミードの議論はマイクロかマクロかといった問題設定以前に生み出された議論であり、これを「マイクロ社会学」という枠組みに押し込んでしまうと、ミード自身が大衆社会化しつつあるアメリカ社会の問題状況にたいして極めて自覚的であったことが欠落してしまう。例えば、直面する新しい問題状況としてミードが引いているのは労働者の実力闘争であり、調整制度なりなんなりの創設により社会的状況を再構成する（徳川 2006）。ここでは必ずしも個人個人の行動に還元されない社会問題に結びついた状況を取り上げるミードの姿が見い出されるだけでなく、その議論はまた社会変革とも結びついていたのである。

さらに、習慣の更新ということに関連しては、デューイと同様、制度の「儀礼化」という問題を取り上げている。制度はその本来の機能に加えて、様々な機能を担いうる。そして、制度が生活の実態から乖離していても、そのお題目だけを掲げて惰性で制度が存続していくような事態がこの儀礼化に相当する（鶴見俊輔の「言葉のお守りの使用法」が思い浮かぶ）。民

主義の形骸化はまさにそうした一例であり、ミードが同時代的にとりあげているのみならず、現代にも当てはまる。こうした問題状況にたいしてなすべきは制度の機能連関を明らかにすること、つまりは再帰的に役割取得の相互連関を吟味することであり、それがミードの教育論に結びつく⁽⁷⁾。

たとえば、こうした吟味を解して職業訓練・産業教育(含む社会科)の意義を明らかにし、就学率を上げるといったことが考えられている。しかも、この過程で就学率等のデータを利用することはミードにとってきわめてふつうのことであった。さらに、児童教育では発達段階に応じたプログラムが構想される⁽⁸⁾。

すでに、制度の儀礼化の部分で指摘したことからもうかがえるように、変動していく社会のなかで、たとえば第一次集団に依存する道徳の習得や従来の職業教育は十分な機能を果たせないまま空回りしながらかたちばかり機能している。ミードは、これを社会心理学の知見から得られた役割取得の相互連関や幼児の発達過程を再帰的になぞる形で教育プログラムとして再編成し、変動していく民主主義社会に見合った道徳や習慣の習得を促すよう方向付けようとしたのである。

もともと、その後はといえば、ホワイトの『組織の中の人間』(1956)の描いた組織の様態の方がより実情に即しているかもしれないが。組織は時空の共有を必要とせずに見知らぬ相手と仕事を共有できる。ここで他者の役割取得に貢献してくれるのは生身の相手ではなく、組織の構成や規則である。ミードの議論そのままでは考えられないような役割の相互連関を編み出すことができるようになったのである。そして、その一端はゴッフマンの著書から読み取ることもできよう。ゴッフマンは少なからずのケースにおいて、組織内の相互行為を描いてもいるからである。

というわけで慣習形成にかかわる機能分析的な議論を皮切りにミードの教育論までを簡単に見てきたが、それは他者の役割取得によるコミュニケーション過程とそこから派生する自己形成の議論、ならびに幼児の発達

上の自己形成過程の段階論を折り返すかたちで論じられていた。とはいえ、幼児の自己形成過程の発達段階がそうであるように、慣習の吟味や学習も単純な相互作用というよりは繰り返しを含んだ相互作用の積み重ねの結果、成果が得られるものであり、もう素朴にミクロの相互作用過程を想定したものとは言いがたい。さらに累積的な段階論の成果を計測することまで視野に入れるのであれば、むしろマクロ的な分析とすらいえるであろう。しかし、こうした物言いがさして意味を持つとも思えない。そもそもミード自身の議論がミクロかマクロかという枠組みの外で展開されているからである。では、それがもつぱら「ミクロ社会学」として括られるようになるブルーマーにあっては、いったいミードから何を持ってきたのだろうか？次にそれを見てみることにしよう。

4. ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論

さて、ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論を取り上げる段であるが、ブルーマーが呈示するミード像のなかでは、ミードがクーリーの経験に相対的な自己論に対して基礎付けを与えようとした生理学的な要素は退けられ、そもそも「me-I」図式も採用せず、「自己との相互作用」ということが言われる（これはトマスの「状況の定義」にほぼ等しいのだが、私にはこの説明が理解できない）。これはミードのそれを自己の主体性をより強調した議論へと変容させる。また、①プレイから②ゲームへというコミュニケーション過程で形成されてくる自己の発達過程は、③「一般化された他者」の形成を独立させて三段階として解釈されるが、これも簡単に言及されるだけである。さらに「態度」という社会心理学的な概念も、むしろトマスの「状況の定義」を思わせるような、「自己との相互作用」に置き換えられ、意味が決まるのも「相互作用の文脈」においてのみである。というわけで、ブルーマーの議論の中心にあるのは、自己を介在したコミュニケーション過程の理論そのものである。そうした意味では、どれだけ自覚しているのかよく分からないが、問題状況の特定とその解決

という科学的方法論のみ希釈してミードから受け継がれている。ただし、これはミード以前からシカゴ学派で続いてきたスタイルでもある。以下、それを概観しておくことにしたい。

ブルーマーに拠れば、人間は対象の持つ「意味」にあわせて行為する。この対象の意味は客観的なものにも心理的なものにも還元されない。意味は人々の「相互作用の文脈」のなかで生じる。とはいえ、この意味はその都度の相互作用にあたってそのまま適用されるものではない。というのも、「行為者」は、その都度、自らの行為を示すにあたって、意味を引き合いに「解釈」を加える。つまり、意味はその都度の行為において変容する。この過程をH・ブルーマーは「自分自身との相互作用」と呼んでいる。そして、これは心理的な要素の相互関係ではなく、「自分自身とのコミュニケーション」であると言われる。すでに確認したように、意味は相互作用の文脈で生じるものであり、解釈する過程は単純に心理的なものには還元できないし、解釈された意味は行為者の社会的行為と適合している。逆に言えば、行為者とは「意味」の変換装置である。

他方、「人間集団」、ないし「社会」は行為に関与している人間から構成される。言い換えるなら、人間集団や社会は行為のなかに存在する。そして、集団生活や社会は相互作用から成り立つ。ところが、多くの場合、社会的相互作用は、他の社会的ないし心理的要因の帰結として扱われてしまい、その存在が軽視されてきた。しかし相互行為の渦中にある人間は、自分の考慮するものとの関連で行動を方向づけ、状況を扱わなければならない。つまり、他者の行動を考慮に入れる必要がある。動因を相互作用の外側に求めることはできないのだ。

ブルーマーはこうした分析をG・H・ミードに由来するものとしている。そして、ミードは社会的相互作用の二つの形式を「音声身振り」と「有意味シンボルの使用」の二つに区別しているが、ブルーマーはこれを「非シンボリックな相互作用」と「シンボリックな相互作用」と言い換える。非シンボリック相互作用は、他者の行為を解釈することなく直接に反応す

るときに生じるものであり（ルソーの「ピティエ」を想起せよ）、シンボリック相互作用とは、その行為の解釈を含んだものである。

とはいえ、たとえば、ボクシングで相手のパンチをかわすとき、それが反射的になされるのであれば前者であり、これはフェイントだと解釈してかわすのであれば後者になる。ということは、限界的な事例ではこの二つを明確に区別することができなくなるはずである。というのも、フェイントをかわすときに、それをフェイントであると意識する必要はないが、フェイントだと意識することもあるからである。そして、意識されようと意識されまいと、それはフェイントをかわす行為として意味を持つだろう。連続する二つの相互作用の区別を鑑みるとき、いくら対象の意味が主観的なものではないとしても、意識（内省）に準拠している一方、原理的に解釈に決着がつけられるとは限らない。

さしあたりこの点はおくとして、シンボリック相互作用は、何らかの身振りの呈示と身振りの意味に対する反応からなり（いわば「区別」と「指し示し」）、これが進行中の行為の一部をなす。このとき身振りする者は相手に期待する反応の指標として身振りを表出している。というわけで、身振りはそれを行う個人にとってだけでなく、それが向けられた相手にとっても意味を持ち、互いにとって身振りが同じ意味を持つとき相互理解が成立している（このとき、相互了解の成立はどのようにして確認できるのかという問いが生じよう）。

こうして身振りの意味は、身振りする個人が何をしようとしているかを示し、身振りを向けられた個人が何をすることになるのかを示す。つまり、身振りの意味は、両者の行為を連合／分節する連繫行為を示している。身振りとし振りをつなぐのが意味なのである。これが互いに相手の役割を取得することであることはみやすい。身振りする個人は意味を介して相手の次の身振りを想定し、身振りを向けられた個人は意味を介して相手自分が期待する身振りが何かを特定する。つまり、互いの立場を考慮し、相手の役割を取得することになる。

このように、人間が生きる「世界」は意味を持つ「対象」から構成されている。対象とは指示・言及できるもののすべてであり、物理的对象、社会的対象、抽象的对象、いずれもシンボリック相互作用の結果、生み出されたものである。対象の性質は、それが個人にとって存在するときに持つ意味からなりたつ。この意味から個人の対象にたいする作用が決まる。だから、個人に応じて「同一」の対象が異なる意味をもつこともありうる。

人間の「環境」は一定の人々が認識し、知っている対象のみから成り立つのであり、環境の性質はこの対象が人々にとってもつ意味によって決まる。だから、人々の行為の意味を理解するためにはまず彼らの対象世界を特定することが必要になる。一方、この対象は社会的な産物である。この対象の意味は、指示の過程をつうじて形成、学習され、また伝達される社会的な過程で形成される。シンボリックな相互作用を営む人間集団はこうした社会過程のなかにあり、対象に意味を付与することで、対象を形成したり維持したり変容させたりする。

人間はこうして対象の意味を加工する能力を持つ。これは人間が「自己self」を持つということである。人間もまた一つの対象である。人間は自分がどんな対象であるか意味付与し、他者に向けて自分の行為を営んでいく。「人間は自分自身の行為の対象となりうるのだ」。ということは、対象は常に意味的に構成されている以上、「自己」それ自体のようなものは実在しない。実在するのは対象としての「自己」に意味を付与した役割を担う何者かである。そして、役割を担う行為者は意味の変換装置になる。

自分を対象として意味を付与する過程は、他人がその個人に意味付与する社会的相互作用と同じ過程にある。ミードはこれを「他者の役割取得」として説明している。すなわち、自分自身を他者の位置におき、そこから自分自身に対して行為するのである。この過程は、①「遊びの段階」、②「ゲームの段階」（具体的な組織化された諸個人の役割）、③「一般化された他者」（抽象的なコミュニティの役割）として知られている。

こうして、人間は「自己」を対象として相互作用できるのだということになる。言ってみれば、自己との相互作用は自分自身に対する指示であり、個人の覚醒した生活は自分の行為を方向づける一連の指示から成り立つ。

この過程は次のように言い換えることができるであろう。他者の役割取得とは自分自身について仮定を立てることであると。つまり、現在の自分が「自己」として他人にどう映るかを考慮できるとき、近接した未来に自分がどうするか仮説を立てられるようになる。自分自身に対して指示するとは、自分の身振りが持つ意味について仮説をたてることであり、この仮説は期待される他者の応接（連繋行為）によって検証される。

そして、このような認識をとおして、われわれは人間を自分自身と相互作用する生命体として理解するようになる。自分が気づいたものごとを、自己指示の過程を介在させて取り扱うという意味で、人間という生命体は「社会的」と言われる。ただ、たとえ「社会」集団を形成していても、刺激と反応、つまり「非シンボリックな相互作用」だけで成り立つような集団は「社会的」とは言わない。

人間は、単に社会集団を形成するという意味においてではなく、シンボリックな相互作用を行うこと、つまりは、自己指示を介在させて行為していくという意味で社会的である。このとき社会に蓄積された意味は変容していく。人間は自己を対象にできることにより「意味」を変換できる。

「自分自身に対して指示を行えるという人間の能力は、人間の行為に明確な特徴を与える。これが意味するのは、人間は、自分の組織体制から環境に反応するのではなく、自分が解釈しなくてはならない世界に直面しているのだということである。個人は、他者の世界の行為の意味を推定し、こういう解釈に照らして自分の行為の計画を立てることによって、自分がその中で行為しなくてはならない状況に対処していかななくてはならない。個人は、自分に作用し、また自分の内部でも作用している要因に反応して、単に行為を解放するのではない。自分の行為を構成し、それを導いていかななくてはならないのである。自分

の行為を構成する作業は、うまくいかないかもしれない。それでも自分の行為を構成しなくてはならないのだ」(Blumer 1969: 15=19頁) こうして人間集団の構成員はお互いの行為を適合させ、分節化することで「連繋行為」を産出し、相互作用を社会的に組織化する。連繋行為はそれ自体明晰な性質を備えており、たえず形成の過程にある。安定した社会では、社会的な行為の大部分は、連繋行為の再起的なパターンというかたちをとる。いわば互いに自分たちの振る舞い方に熟知している。しかし、それは人間集団の本質というわけではない。

どんな社会であれ確立された連繋行為の連続というわけではない。問題に直面し、既存の規則が不適切になっている場面においては新しい状況がたえず出現している。こうした行動規定のない領域も、同じく再起的である。のみならず、すでに確立されている再起的な連繋行為の場合でも、個々の事例は新しく形成されなくてはならない。いずれも指示と解釈の二重の過程の産物なのである。「集団のなかの社会過程で規則が生じ、示されるのであって、規則が集団を作ったり示したりするわけではない」。

これは分業のようなきわめて多くの人間集団から構成されるような行為の拡張された相互連結についても同様である。「彼らは何を行うかは、彼らが自分たちが行為すべき状況をどのように定義するかということの結果なのである」(Blumer 1969: 19=25頁)。だから、ブルマーにとっては集団や組織もただか相互行為の文脈(「状況の定義」)から派生してくるものの一つにすぎない。「新しいものであれ、長く確立されたものであれ、すべての連繋的な行為は、それに先行する行為という背景の中から、必然的に生まれてきたものである」(Blumer 1969: 20-25頁)。新しい種類の連繋行為もこのような背景・文脈の下に出現してくる。新しい連繋行為の形成に関与する者は、すでに自分たちが所有している対象の世界と意味の集合と解釈の図式とを持ち込んでおり、新しい連繋行為は、先行する連繋行為という文脈から出現してくるし、この文脈を離れては理解できない。

ブルマーは、他方で、これもパーク以来のシカゴ学派の研究の伝統に

連なる「集合行動論」を展開しているが、それがどのようなものになるかは、行論からおおよそ見当が着くであろう。行為の意味はあくまでも、相互作用から決まるのであり、集団や組織が直接影響するものではない以上、地震やトランプの大統領当選など「問題状況」に対する反応は、当初は、非シンボリックな相互作用から始まるかもしれないが、それがどのような問題状況として受け止められていくかはシンボリックな相互作用の文脈のなかで決まってくるはずである。つまり、集合行動をとりまく意味はシンボリックな相互作用の文脈のなかで決まる。

たとえば、ブルーマーは「社会的な不安」はそうした相互作用の文脈から生じてくる。つまり、行為者による解釈を受けなければ「問題状況」は問題状況たりえず、それに対する意味付けやそれに見合った反応も生じてこない。これは卓見と言ってよい。問題状況の設定はしばしば外部の観察者を密輸入することによってなされてしまうからである（これは後に社会構築主義に向けられる批判であり、「分析的リアリズム」もそれに該当しよう）。そして、これが先述したパークの「集合行動論」を組み直したものであることは見やすいであろう。出来事の動因を相互行為の文脈における自己との相互作用に落とし込むこと、ここではこれを「内在化」と呼んでおく。最後にこうした議論枠組みの到達点とも言える「産業化」の中立性の議論を見ておくことで、ブルーマーの議論の広がりと言語を確定して本稿を終えることにしたい。

5. ブルーマーの「産業化」論

はじめに確認しておいたように、シカゴ学派の面々は、W・I・トマスの「状況の定義」論やG・H・ミードが言う「他者の役割取得」からおおよそ理論的な裏付けが得られるようなものとして、フィールドワークを行っており、例えば、逸脱から新しい行動様式の出現を説明するにはミードの議論をあてはめることができた。シカゴ学派のフィールドワークの成果は、当時の社会心理学研究の成果がはたらくような社会現象として扱わ

れてきたのである。

では、そうした先行する議論を社会的に洗練させたハーバート・ブルーマーの「自己との相互作用」を中心としたシンボリック相互作用論は、よりマクロな社会現象とどのようにかかわりを取り結ぶのだろうか？この自らの議論が持つ含意を丁寧につきつめて検討したのが、ブルーマーの1960年代前半作成の未完の草稿『産業化論考』(Blumer 1990)である。興味深いことに、この時期はブルーマーがG・H・ミードを積極的に評価し始めた時期とほぼ重なる。

本書でブルーマーが明らかにしようとするのは、社会変動の動因として「産業化」がどのように働くかについてである。ところが、面白いことここでブルーマーが確認していくのは、「産業化の過程の中立性」なのである。つまり、「産業化」の決定因は特定できない。拍子抜けするような結論だが、これは前節末尾で確認したことから自然に帰結する事柄であり、このことが含意する社会学理論上の意義は小さくない。

ちなみに、ブルーマーはシンボリック相互作用論に基づく方法論を説明するにあたって、実際に行われている相互作用を中心として出来事の連関を経験的観察することを提唱した。相互作用が中心になるのは、もちろん、ここに含まれる「自己との相互作用」が相互作用の動因となるからである。そして、実際の行為者がそうであるように、研究者も対象との相互作用関係に入るのであり、他者の役割取得ということがいわれる。実際、行為者の立場にたつて観察(自己との相互作用)をしてみろというわけである。採用する概念も変数であったり、確固とした定義を与えられたものではなく、「感受概念」が推奨される。つまり、対象との相互作用の過程で見えてきたものが反映されるような概念設定が求められるわけであり、ここでも、その過程で「自己との相互作用」がはたらくことになるであろう。

しかし、これから見ていくブルーマーの「産業化」をめぐる議論は、最後の「感受概念」の採用という点をのぞけば、こうしたアプローチの適用可能性を示唆してはいても実際に採用できているわけではない。むしろ、

肝心な部分がブラックボックスになっている。その分、感受概念も感受概念として十分なものなのか疑問が出てくる。「産業化」等の概念は観察者が採用する外在的な概念であり、それを吟味した上で最大公約数的なものを採用したところで、それが観察に應用されてその幅を変化させていくことがなければ、「感受概念」として満足したものにはならないからである。上記の点は最後に立ち返ることにして、とにかく、ブルーマーの議論を見ていくことにしよう。ブルーマーの議論の道筋は以下のようなものである。

まず、ブルーマーは「産業化」の概念について先行研究を参照しながら「感受的」に定義し、産業化が集団生活に侵入する九つの経路を想定する。だが、この「九つの経路」の発展、展開の仕方は多様であり、なおかつ産業化の過程に影響する「社会的背景」(文脈)も多様で、しかも、二つは相互作用する関係にある。つまり、どうなるかは偶有的なのである。

また、「伝統的な秩序」が「産業化」にどのように対応するかについても「五つのパターン」を想定しているが、「産業化への対応」も様々なうえ、やはり二つは相互作用する関係にある。他方、産業化は様々な混乱を引き起こす。この「産業化が引き起こす混乱」については「三つの経路」が想定されているが、産業化の影響は人々や政府の反応に依存する。というわけで、「産業化」が多くの社会変動をもたらすということは否定できない。しかし、それは始まるであろう変化の形態や性格、またその範囲を左右するわけではない。他方で、「産業化過程と、それが進入していく集団生活との相互作用を詳しく分析すれば、その過程の中立的な役割をずっと効果的に示すことができる」(Blumer 1990: 204 頁)。

このように産業化の過程は偶有的であり、なんらかの形で一対一対応するような因果的な分析に回収できるようなものではない。なぜなら、ブルーマーのシンボリック相互作用論によれば、産業化も含めた社会過程とは、個人や集団の「相互作用」からなる。そして、相互作用の帰結は「自己との相互作用」に依存し一意的には決まらない。だから、「産業化の過程」は

「中立的」にはたらくことになる。同時代的に見れば、T・パーソンズの構造機能主義への批判の一つに相当する議論を、シンボリック相互作用論の枠組みでもって展開していたわけである。ここに、初期シカゴ学派のフィールドワークとミードやプラグマティスト等の理論研究との照応関係のより洗練されたものを見て取ることはおかしな話ではあるまい⁹⁾。

しかし、それではその偶有性をもたらす相互作用はどのような形で進行していくのか。すでに確認しておいたように、残念ながら、この点についてブルーマーは具体的には何も述べていない。ただ、相互作用が入る余地があるということを示しているだけなのである。たとえば、パークの議論をも視野に入れば、ここには集合行動論を展開する余地もあれば、ブルーマーが軽く見ている非シンボリックな相互作用の働く余地もある。一方で、そもそも、ここをシンボリック相互作用論で埋めなければならない必然性があるわけでもない。何らかの連携行為のパターンが形成するにあたって、そのパターンがいかに形成・蓄積・継承されるかは、関係する個人や集団に相対的であり、まさに偶有的なものになる。それを見なければ、この説明は完結しまい。

ブルーマーは社会というものを個人ないしは集団の相互作用というレベルに持ってきたが、本書では逸脱や新しい行動様式の出現をめぐる議論が「ミクロ」と「マクロ」の間で宙に浮いている。本書をもってシンボリック相互作用論のミクロ・マクロ・リンクといった指摘がなされることもあるが、肝心の部分がブランクになっている以上、「ミクロ社会学」の代表のように言われているブルーマーのシンボリック相互作用論が、少なくとも本書では「マクロ」な過程から具体的に降りてくることなく「新しい連携行為形態の出現」を想定するに終わっている。そして、これは最初に上げた『ホワイトカラーの犯罪』のケースとよく似ている。議論の中心にある空白は個人ないしは集団が相互作用しながら、新しい行動様式が出現する「ミクロ」な「社会性」なのである¹⁰⁾。

すでに、ミードの議論を検討するときにも確認したが、逸脱行動の幅は

広い。ブルーマーの言い方にならえば、非シンボリックな相互作用から、ちょっとしたやり損ない、そして新しい行動様式の形成まで広がりをもつが、本来問題になるのは一番最後、これもブルーマーの言い方にならうならば新しい連携行為のパターンの形成とその流布ということになるだろう。そして、それは相互行為の文脈の中で生じる。ところが、ブルーマーは逸脱状況が新しい行動様式を作り出す過程についてうまく説明することができていない。というより、この部分をまったく説明していないということが少なくとも本書についてははっきりしている。

他方、ブルーマーに連なる議論を挙げてみれば、たとえば、理念系という形ではあるが、発展の多様性を行為連関から説明する様式はM・ウェーバーのそれに連なるものである。さらに、ミードにはすでに学習論として既存の相互作用を振り返る過程があった。既存の相互作用の吟味は場合によっては新しい相互作用の連携形式を生み出すことがありうる。ミードにはある程度の萌芽が見られたのであるが、ここは、統計データの利用とあわせて、ブルーマーが注意を向けなかった部分にあたるようである。

そして、この空白部分を埋める作業は以降の研究のなかで確実になされてきたと思う。たとえば、同じくシンボリック相互作用論の学統をつぐアンセルム・ストラウスは、あきらかにアーヴィング・ゴッフマンの研究を意識しながら（たとえば、「相互行為儀礼」や「役割距離」など）、アイデンティティをめぐる問題を取り上げるが、それにより他者の役割取得では説明しきれない相互作用の連携関係を説明している。そのゴッフマンやハワード・ベッカーは、「逸脱者」や「スティグマ」を取り上げることで、相互行為の当事者ではない第三者が相互行為上の人物を評価する過程を取り出し、当事者の「経歴」や「生活誌」といった「歴史的」過程が相互作用過程にどのように影響するのかを示した。さらに、ゴッフマンにいたっては、相互行為内でこうした「より広い社会」の事柄がどのように関連性を持ってくるのか、また、それが相互行為の再生産にどのように寄与するのかまで論じている。エスノメソドロジー／会話分析ならより細かい相互

行為過程をなぞることができるだろう。

このように、パークやミードの時点ですでに確認できた問題状況とそのプラグマティックな解決の説明は、より具体的かつ継続的な相互行為の再生産過程として分析の対象になっている。一方で、ベッカーやゴッフマンはもはや「自己との相互作用」を問題にしなくなっていく⁽¹²⁾。自己をめぐる問題も対面的相互行為状況それ自体のなかで取り扱えるようになっていくからである。さらに、よりマクロ的な視点から社会的状況の再生産過程を見たいのなら、ピエール・ブルデューの社会的再生産の理論を参照することもできるだろう。つまり、以降の議論の展開にはそれ相応のものがあるのだ。

無論、後の議論の展開から遡ってブルマーを評価し、批判することは無意味である。だが、ブルマーの議論がどこまでたどりつけていたのかを評価する目安にはなる。しかも、シンボリック相互作用論の学統は今でも続いており、その後どのような進展をとげてきたのかを検討する一里塚にもなるはずである。もっとも、この点は後日の課題として本稿の議論はここまでとしておきたい。

[注]

- 1) シカゴ学派初期の潮流については、簡単には(Blumer, M. 1984)や(中野・宝月編 2003)、あるいはパーク(町村・好井 1986)を参照のこと、慣習に焦点を充てた米国の社会心理学の発展過程は(Karppf 1932)を参照。「組織革命」については(Boulding 1953)を参照。
- 2) パークの集合行動論については、植村(1996)が要領を得た紹介をしている。また、パーク([町村・好井 1986])の諸論文も参照。同化のような社会過程を考える上ですでにパークは「経歴」(career)という概念を用いている。
- 3) J・デューイやG・H・ミードは「科学的な方法論」の形成にあたってG・W・F・ヘーゲルの影響を受けている、ヘーゲル弁証法とプラグマティズムの方法論との関係については上山(1963)を参照のこと

- 4) ここに人間は他者の欲望を欲望するというヘーゲル話の希釈化したヴァージョンを見ることもできよう。
- 5) ここにアダム・スミスの impartial spectator との類似性を見ることもできる。すでに、高島善哉 (1942) が注でこの点を指摘しており、近年の比較研究としては小川英二 (1997)、Costelloe (1997)、Wilson & Dixon (2004) などがある。
- 6) 同種の議論は A・シュッツ (Schutz 1932) に見られる。共に時間を共有する関係においては、自分の知り得ないことを他人が知ることができる。これは反省過程なき「私 (I)」の発露となる。
- 7) ミードの教育論としては Mead (2001)、Mead (2011) が公刊されている。ミードの慣習形成論や教育論については徳川 (2006) も参照のこと。
- 8) 行為連関を追いかけていって、例えば工場なりなりの労働過程の全体を描き出し、労働者に示そうとするのであれば、これは労働者の分断された状況を「疎外された労働」として描いた K・マルクスと親近性を持つことになる。マルクスとミードの関係を論じたものとしては Goff (1980) がある。
- 9) 実際、J・H・ターナーが T・パーソンズとシンボリック相互作用論との親近性を指摘しているのに対して、ブルーマーは大きな反発を示す一方で、T・パーソンズはこれを肯定的に受け止めている。しかし、ブルーマーは外在的な因果性を避けているのであり、パーソンズの議論として AGIL 図式を想定してよいならこの指摘は無理筋というものであろう。なお、三者の議論については赤坂真人 (2007) を参照のこと。
- 10) このブルーマーの草稿 (Blumer 1990) は終わりの構成がいささか不自然で「社会政策の意味」という項で話がとぎれているが、これはおそらく「社会政策」の重要性についてとりあげても「産業化」の場合と同じくその中立性が指摘できってしまうことは避けられないからではないか。
- 11) 同種の議論としては H・ガーフィンケルに「地位降格儀礼」という論文 Garfinkel (1956) がある。
- 12) ベッカーやゴッフマンはミードの「I-me」式の役割の更新に加えて、その都度の役割を超えた全体としての「人格 (人物)」という概念を導入しているが、

とりわけゴッフマンにあたっては、G・ジンメルの議論(Simmel 1908)を引き継いでいると思われる。また、ゴッフマンの議論のこの部分をもっともよく理解し、自分の議論に取り込んでいるのはN・ルーマンの『制度としての基本権』(Luhmann 1965)である。

さらに、ゴッフマンは対面的相互行為が営まれる「社会的状況」を考慮に入れることではじめて「自己との相互作用」等を問題にできるようになると議論を完全に逆転させている(Goffman 1964)。

[参考文献]

- 赤坂真人 2007「パーソンズ以降のシステム理論の展開」『吉備国際大学社会学部研究紀要』17: 1-14
- 芦川 晋 2015「自己に生まれてくる隙間 — ゴッフマン理論から読み解く自己の構成 —」『触発するゴッフマン』新曜社
- 芦川 晋 forthcoming 「「自己」の「社会的構築」～昔から社会学者は「自己の構成」について語り続けているが一体どこが変わったのか?」『社会学評論』
- Becker, Howard, 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Free Press. (=2011 村上直之訳『完訳 アウトサイダーズ—ラベリング理論再考—』現代人文社)
- Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interaction*, Prentice-Hall. (=1991 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房)
- Blumer, Herbert, 1971, "Social Problems as Collective Behavior," *Social Problems* 18: 298-306 (=2006 桑原司・山口健一訳「集合行動としての社会問題」『鹿児島大学経済学論集』66: 41-55)
- Blumer, Herbert, 1990, *Industrialization as an Agent of Social Change*, Walter de Gruyter. (=1995 片桐雅? 他訳『産業化論考—シンボリック相互作用論の視点から—』勁草書房)
- Blumer, Martin, 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, University of Chicago

Press.

- Boulding, Kenneth E., 1953, *The Organizational Revolution: A Study in the Ethics of Economic Organization*, Harper & Brothers. (=1960 日本経済新聞社訳『組織革命』日本経済新聞社)
- Cooley, Charles Horton, 1902, *Human Nature and Social Order*, Charles Scriber's Sons. (=1921 納武律訳『社会と我』ロゴス社)
- Cooley, Charles Horton, 1909, *Social Organization*, Charles Scriber's Sons. (=1970 大橋幸・菊池喜代志訳『社会組織論』青木書店)
- Cooley, Charles Horton, 1920, *The Social Process*, Charles Scriber's Sons.
- Costelloe, Timothy M., 1997, Contract or coincidence: George Herbert Mead and Adam Smith on self and society, *History of the Human Sciences* Vol.10-2: .81-109
- Dulczewski, Zygmunt, 19??, Florian Znanieck: Co-Authordes Werkes "The Polish Peasant" (=2008 佐藤嘉一訳「『ポーランド農民』の共著者としてのズナニエツキ」『立命館産業社会論集』第4巻第3号:143-156)
- 船津衛 1976『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣
- 船津衛 1983『自我の社会理論』(社会学叢書)恒星社厚生閣
- 船津衛 1989『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣
- 船津衛 2012『社会的自我論の現代的展開』東信堂
- 船津衛(編)1997『G. H. ミードの世界—ミード研究の最前線—』恒星社厚生閣
- 船津衛・宝月誠(編)1995『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣
- Garfinkel, Harold, 1956, Conditions of successful degradation ceremonies. *American Journal of Sociology*, 61:420-424.
- Goff, T. W.,1980, *Marx and Mead: Contribution to a Sociology of Knowledge*, Routledge. (=河村望監訳『マルクスとミード—知識社会学への寄与—』お茶の水書房)
- Goffman, Erving, 1964, Neglected Situation, *American Anthropologist*, vol. 66-6: 133-136. (=forthcoming 芦川晋訳「状況が等閑にされてきた」『エスノ

メソドロジー会話分析ハンドブック』(仮題) 新陽社)

後藤将之 1987『ジョージ・ハーバート・ミードーコミュニケーションと社会心理学の理論』 弘文社

Holstein, James A. & Jaber F. Gubrium, 2000, *The Self We Live by*, Oxford University Press.

宝月誠・中野正大(編) 1997『シカゴ学派の研究ー初期モノグラフを読むー』 恒星社厚生閣

Karpf, Fay Berger, 1932, *American Social Psychology : Its Origin, Development, and European Background*, Russell & Russell. (=1987 大橋英寿監訳『社会心理学の源流と展開』 勁草書房)

片桐雅隆(編) 1989『意味と日常世界ーシンボリック・インタラクショニズムの社会学ー』 世界思想社

Kitsuse, J. I. & Spector, M., 1977, *Constructing Social Problems*, Cummings. (=1992 村上・中河・鮎川・森訳『社会問題の構築ーラベリング理論を越えてー』 マルジュ社)

町村敬志・好井裕明編訳『実験室としての都市ーパーク社会学論文選ー』 お茶の水書房

Mead, George Herbert, 1912, *The Social Self*, *Journal of Philosophy* 10: 374-380. (=1991 船津・徳川訳「社会的自我」 船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』 恒星社厚生閣)

Mead, George Herbert, 1922, *A Behavioristic Account of the Significant Symbol*, *Journal of Philosophy* 19: 157-163. (=1991 船津・徳川訳「意味のあるシンボルについての行動主義的説明」 船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』 恒星社厚生閣)

Mead, George Herbert, 1925, *The General Self and Social Control*, *International Journal of Ethics* 35: 257-277. (=1991 船津・徳川訳「自我の発生と社会的コントロール」 船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』 恒星社厚生閣)

- Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self, and Society*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1973 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店).
- Mead, George Herbert, 1936, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Chicago: University of Chicago Press. (=1994 魚津郁夫・小柳正弘『西洋近代思想史—十九世紀の思想のうごき(上)(下)』講談社現代新書)
- Mead, George Herbert, 1982, *The Individual and the Social Self: Unpublished Essays*, ed. David L. Miller, University of Chicago Press. (=2004 宝月誠・加藤一己訳『G.H. ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房、=1990 小川英司・近藤敏夫(部分)訳『個人と社会的自我』いなほ書房)
- Mead, George Herbert, 2001, *Play, School, and Society*, ed. Mary Jo Deegan, Peter Lang Pub Inc.
- Mead, George Herbert, 2011, *Philosophy of Education*, Routledge.
- Merton, Robert K., 1957 (1949), *Social Theory and Social Structure*, Free Press. (=1961 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房)
- 中野正大・宝月誠(編) 2003『シカゴ学派の社会学』世界思想社
- Natanson, Kaurice, 1956, *The Social Dynamics of George H. Mead*, Public affairs Press. (=1983, 長田攻一・川越次郎訳『G・H・ミードの動的社會理論』新泉社)
- 小川英司 1997『新版 G・H・ミードの世界』いなほ書房
- Park, Robert, E., 1916, *The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, *AJS* 20: 577-612. (=1965 笹森秀雄訳「都市—都市環境における人間行動研究のための若干の示唆」鈴木広編『都市化の社会学』成分書房)
- Park, Robert, E., 1926, *Behind our Masks*, *Survey Graphic* 56: 135-139. (=1986 好井裕明訳「仮面の背後にあるもの」町村・好井編訳『実験室としての都市』37-62)

- Park, Robert, E., 1928a, The Bases of Race Prejudice, *The Annals of the American Academy of the Political and Social Science* 140:11-20. (= 1986 好井裕明訳「人種偏見の基盤」町村・好井編訳『実験室としての都市』63-90)
- Park, Robert, E., 1928b, Human Migration and Marginal Man, *American Journal of Sociology*, 33:881-893. (=1986 好井裕明訳「人間の移住とマージナル・マン」町村・好井編訳『実験室としての都市』91-112)
- Park, Robert, E., 1929, The City as a Social Laboratory, in T. V. Smith & E. V. White (eds.), *Chicago: An Experiment of Social Science Research*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1986 町村敬志訳「社会的実験室としての都市」町村・好井編訳『実験室としての都市』11-36)
- Park, Robert, E., 1936, Human Ecology, *American Journal of Sociology*, 42-1: 1-15. (=1986 町村敬志訳「人間生態学」町村・好井編訳『実験室としての都市』155-180)
- Park, Robert, E., 1940, News as a Human Knowledge: A Chapter in the Sociology of Knowledge, *American Journal of Sociology* 45-5: 669-686. (=1986 町村敬志訳「知識の一形式としてのニュース」町村・好井編訳『実験室としての都市』181-212)
- Park, Robert, E., Roderick McKenzie & Ernest Watson Burgess., 1925, *The City*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1972 倉田和四生訳『都市』鹿島出版界)
- Parsons, Talcott, 1975, Exchange on Turner, Parsons as a Symbolic Interactionism" *Sociological Inquiry* 44-5: 59-68
- Riesman, David, Nathan Glazer, Reuel Denney, 1950, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*, Yale University Press. (= 1964 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房)
- Schutz, Alfred, 1932, *Der Sinn Aufbau der Sozial Welt: Eine Einleitung in der verstehende Soziologie*, Springer. (=2006 (1982) 佐藤嘉一訳『社

会的世界の意味構成 — 理解社会学入門 —』(改訳版) 木鐸社)

Simmel, Georg, 1908, *Soziologie*, Duncker & Humblot. (=1994 居安正訳『社会学』白水社)

Strauss, Anselm L., 1955, *Mirrors & Masks: The Search for Identity*, Free Press. (=2001 片桐雅隆監訳『鏡と仮面—アイデンティティの社会心理学』世界思想社)

Sumner, William G., 1906, *Folkways*, Ginn & Company. (=1975 青柳清隆・園田恭一・山本英司訳『フォークウェイズ』青木書店)

Thomas, William E. & Florian W. Znaniecki, 1918-1920, *The Polish Peasant in Europe and America*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1983 桜井厚(部分)訳『生活史の社会学—ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民—』御茶の水書房)

高島善哉 1942『アダム・スミスの市民社会体系』日本評論社

鶴見俊輔 1986『アメリカ哲学』講談社学術文庫

徳川直人 2006『G・H・ミードの社会理論』東北大学出版会

Turner, Jonathan H., 1974, Parsons as a Symbolic Interactionist : A Comparison of Action and Interaction Theory., *Sociological Inquiry*, 44-4: 283-294.

植村貴裕 1996「パーク社会心理学の射程」『立正大学文学部論叢』104: 35-47

上山春平 1963『弁証法の系譜 — マルクス主義とプラグマティズム—』未來社

Whyte, William H., 1956, *The Organizational Man*, Garden City, NY : Doubleday. (=1959 岡部慶三・藤永保訳『組織のなかの人間(上)(下)』東京創元社)

Wilson, David & William Dixon, 2004, The Irreducibly Social Self in Classical Economy: Adam Smith and Thomas Chalmers meet G.H. Mead, *History of Economics Review* 42: 121-136

安川 一 1985a「G・H・ミード「社会心理学」の性格と課題」『社会学評論』142: 71-85

安川 一 1985b 「G・H・ミードの社会理論におけるホワイトヘッド自然哲学」
『一橋論叢』93-5: 689-708

安川 一 1986a 「『心的なものの定義』: 主観性をめぐって——G. H. ミード『行為の哲学』に向けて(その1)——」『一橋研究』11-1: 83-107

安川 一 1986b 「『社会行動主義』とG. H. ミード・I——G. H. ミード『行為の哲学』に向けて(その2)——」『一橋研究』11-2: 105-132.

Znaniecki, Florian W., 1934, *The Method of Sociology*, New York: Farrar & Rinehart. (=1971 下田直春訳『社会学の方法』新泉社)

なお、本論文は2013年中京大学特定研究助成による研究成果である。

